

防衛大学校本科第19期学生及び理工学研究科第10期学生
入校式における学校長式辞（昭和46年4月5日）

本日、防衛大学校本科第19期学生及び研究科第10期学生の入校式を行うに当たりまして、土屋防衛政務次官^{注(1)}、板谷統合幕僚会議議長^{注(2)}をはじめ、数多くの来賓並びに父兄各位の御臨席を得ましたことに対し、防衛大学校を代表いたしまして、心から御礼申し上げる次第です。

今日のおめでたい日に、まず本科の新入生諸君に防衛大学校の使命について一言しておきたいと思います。これは研究科の諸君にもよく考えていただきたい点です。防衛庁設置法の第33条は、「防衛大学校は、幹部自衛官となるべき者を教育訓練する機関とする」と規定しています。防衛大学校の学生は、将来幹部自衛官となるべき者という明確な使命



第3代学校長 猪木 正道

を与えられており、このため諸君は、ただ今防衛大学校学生を命ぜられ、自衛隊員となったのであります。この点において諸君は、一般の大学生とは国法上の身分が違います。さて防衛大学校規則第4条は、本科の教育目的を次のように述べています。即ち「本科学生に将来自衛隊の幹部自衛官として必要な識見及び能力を与え、かつ伸展性のある資質を育成することを目的とする」というのであります。この前段は当然のことですが、後段にある伸展性のある資質という点は特に重要であると思います。

歴史の示すところによれば、一般に軍学校の教育は、伸展性のある資質を育成するという点では必ずしも成功していません。第2次世界大戦の初め、ポーランドは開戦後わずか2週間余りでドイツ軍によって壊滅的な打撃を加えられ、亡国の悲運に見舞われました。ポーランド軍は現役の48個師団を持っており、ドイツ軍の現役師団数が52個にすぎなかったこと、ドイツの西部国境には、ポーランドの同盟国であるフランスが現役の65個師団を含む110個師団を展開していたことを考慮しますと、ポーランド軍はドイツ軍の進撃をくいとめることができたはずであります。少なくともフランスが動員を完了し、西部戦線において攻勢をとれるまでは持ちこたえられたでしょう。ところ

注(1) 土屋義彦

注(2) 板谷隆一（海）

がドイツ軍が6つの戦車師団を中心に合計14個の機械化師団を持っており、機動力において断然優れていたばかりでなく、1939年9月1日、開戦と同時に制空権を獲得したのに対して、ポーランド軍には戦車師団が全く欠けており、対戦車砲も高射砲も著しく不足していました。

ポーランド軍の高級将校たちは騎兵の威力を盲信しており、自慢の騎兵を先頭にベルリンへ進撃できると豪語していたのです。イギリスの著名な戦争史家リデル・ハートは、ポーランド軍首脳の戦争思想は実に80年も時代遅れであったと批判しています。軍の最高首脳が伸展性ある資質に欠けていたため、惨めな敗戦を経験したのはポーランドだけではありません。ナポレオン以来、陸軍の伝統を誇るフランスも、軍の首脳が伸展性ある資質を備えていなかったばかりに、ポーランドに遅れることわずか9か月でドイツの軍門に降りました。しかも注目すべき点は、フランス軍はドイツ軍よりも、大型の戦車を大量に持っていたにもかかわらず、戦車と歩兵との協力という第1次大戦末期の考え方から脱却できず、戦車師団を中核とする機械化師団の機動力と戦術空軍との協力によって相手方を蹂躪し、粉碎するというドイツ軍の電撃戦によって、実質的にはやはりわずか2週間で完敗したことです。フランス軍内には、ドゴール將軍のような電撃戦の先覚者もいたのですが、彼の主張に耳を傾けるものはほとんどいなかったのです。

国軍の首脳が伸展性ある資質を欠いている場合、非常に大きな軍事的損害をこうむることは、わが日本国民も、ノモンハン事件や第2次大戦中のいくつかの段階において、骨身に徹して経験したところでもあります。もちろんわが国の場合も、ポーランドやフランスの事例も、決して軍首脳だけの責任によって軍事的破局が起ったのではありません。政治家の責任も大きく、政治と軍事との関係にもいろいろ研究すべき問題点が存しています。しかしこれらの例を通じて、国軍の首脳に伸展性ある資質が備わっているか否かが、国家の存亡を左右するという点だけは断言できるはずであります。わが防衛大学校が本科の教育訓練の目的を規定する際、伸展性ある資質を強調した背景には、このように大量の血を流したわが民族の歴史的経験があり、歴史の教訓が厳として存在することを忘れてはなりません。本日入校された19期生諸君が、自衛隊の最高首脳に昇進される頃は、20世紀の終りか21世紀の始めでありましょう。その頃、日本国に対していかなる形の脅威が存在するかは、今日誰も予測できないと思います。これが本校の教育が伸展性ある資質の育成に努めなければならない所以であります。

この目的を達成するため、防衛大学校規則の第5条は教育訓練の方針を定めて、第一に広い視野を開くこと。第二に科学的な思考力を養うこと。第三に豊かな人間性を培うことを指摘しています。

自衛隊は国法の定める日本国でただ一つの防衛集団でありますから、その幹部が広い視野を欠いたり、科学的な思考力を持ち合わさなかったり、豊かな人間性を備えていなかったりした場合、わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、直接侵略及び間

接侵略に対し、わが国を防衛し、必要に応じ公共の秩序の維持に当るという自衛隊の任務は達成できません。否そればかりでなく、広い視野、科学的な思考力及び豊かな人間性という3つの条件が欠けた幹部の指揮する防衛集団は破壊集団に転落し、国家を守るかわりに、かえってこれを亡ぼす恐れさえあります。

この意味で、防衛大学校が大学設置基準に準拠した一般教育、理工学、更に防衛学に関する学理及び応用を授けていることは、特に重要だと思えます。防衛大学校に在学中、諸君は何よりもまず十分に勉強して、広い視野と科学的な思考力、豊かな人間性を身につけていただきたい。教室や実験室の授業及び学校の内外における訓練から教えられるばかりでなく、図書館などを利用して読書に励み、また校友会活動等を通じて自ら学ぶことに努めていただきたい。

一般教育、専門教育などの学問をするという点では、防衛大学校は一般の大学と異なりません。しかし将来、自衛隊の幹部たるべき者を教育し、訓練するという点で、本校は他の大学にない二つの重大な特徴を持っています。一つは教育課程と並行して訓練課程がある点、今一つは全学生が学生舎に起居して規律ある団体生活を行う点であります。訓練課程の大部分は春季、夏季、秋季及び冬季の定期訓練という形で集中的に行われ、将来自衛隊の幹部となるのに必要不可欠な基礎を修得させるようになっています。学生舎生活は、諸君が団体生活のマナーを身につけ、知らず知らずのうちに、将来指揮官となるために必要な能力を育てあげる場であります。

第2次世界大戦で日本が敗れて以来、わが国の伝統的価値の多くのものは崩れ去り、教育の分野においても、躰とか鍛えるという点がややもすればなおざりにされ、動物的本能を野放しにするのが正しい教育であるかのような錯覚が横行してまいりました。すべての社会的規範を人間性に対する抑圧であると断ずる破壊思想が、わが国を含む先進諸国の大学を修羅の場と化したことは諸君も見聞したことでしょう。人間を禽獣から区別し、文化を野蛮から分かつものは、法と道徳という社会的規範であります。諸君は防衛大学校の学生舎生活において、特に最初の数ヶ月間は苦痛を感ずるかも知れません。いろいろの規律は何のために守らなければならないのか、諸君は疑問に思うことでしょう。しかし一般の大学が訓練を行わず、団体生活の躰を教えない今日こそ、防衛大学校の存在意義は大きいのです。

国民のほとんど全部が団体生活の規律を知らない状況の下で、直接間接の侵略並びに暴動のような人災や、あるいは大規模な災害のような非常事態が起った場合、規律正しく行動する自衛隊が健在でなければ、国民生活はたちまち混乱し、生存に必要な水、食料、医薬品等の入手も困難になりましょう。1億の同胞が安心して生活するためには自衛隊は不可欠であり、その幹部たるべき諸君の責任は重いのです。

研究科の諸君は、すでに自衛隊の部隊や機関の経験をしておられ、特に選ばれて、今後2年間高度の科学技術の研究に専念されるわけであります。国家の安全保障が科学技

術の進歩に依存している点については、私から改めて申し上げるまでもないでしょう。わが国の防衛に関する科学技術は、諸君の先輩たちの努力により近年長足の進歩をとげてまいりましたが、まだまだ遅れている分野も多いと聞いています。諸君は研究科で勉強される場合、つねに日本国の安全保障を双肩に担っている気持を持ちつづけていただきたいと思います。

以上を以って私の式辞を終わります。